2. 幼児のパーソナリティの健康度の評価

愛育相談所　山本清恵
吉川政夫（東海大学）
客員研究員　石井哲夫（日本社会事業大学）
調査研究企画部　網野武博
嘱託研究員　朽尾　勲（厚生省児童家庭局）
山本　保（　〃　）
石橋悦子（子どもの生活研究所）

要約：　われわれは、子どもの情緒発達をパーソナリティの「健康」の視点から捉えることにより、幼児期のパーソナリティの形成に養育環境がいかにかかわり、影響を及ぼしているかについて検討を試みた。幼稚園児９３名を対象にして、親と担任の両者に対し、パーソナリティの健康に関する４０評価項目についてアンケート調査を行った。その結果、（1）両者とも、子どもに好意的にかかわりを持っている、（2）家庭と園の養育環境の違いが、子どもの行動に表れている、等が示された。

見出し語：　パーソナリティの健康　幼児期　養育環境の影響

Evaluation of the Health of Child's Personality

Kiyoe YAMAMOTO, Masao KIKKAWA, Tetsuo ISHII, Takehiro AMINO,
Isao TOCHIO, Tamotu YAMAMOTO, Etsuko ISHIBASHI

We tried to examine how upbringing environment is concerned with and affects the formation of the personality in infanthood, viewing the emotional development of children from the standpoint of health of their personalities. The questionnairing consisting of 40 items concerning the health of personality was conducted on both the parents and the teachers in charge of 93 kindergarten children. The results of the examination showed; (1) both the parents and teachers in charge were favorably concerned with the children, and (2) the difference between home environment and kindergarten environment was revealed in children's behaviors.

Key words: Healthy Personality, Infanthood, Effect of Upbringing Environment

I. 研究目的

何らかの養育機能の失調は子どもの情緒発達を阻害する傾向にあることは、本プロジェクトの数年来の研究で明らかにされつつある。また、先年行なった情緒障害児短期治療施設及び養護施設の入所児を対象とする調査において、父母の存在やその関係性が入所児のパーソナリティの健康にかかわりが深いことが分かった。[1]

子どもの発達過程に於て、われわれはパーソナリティの健康を、生物としてのホメオスターシス（苦痛・危険を回避する防衛活動と、安定・満足を求める充足活動）と、自己実現に向けての自我活動の両面に注目した上であえて、ストレスや脅威に対処し、自己を向上させる自我活動の面に焦点を当てて、幼児期のパーソナリティの健康を考えてみたい。パーソナリティの健康を表すものとしては、本研究に於て既に８領域（安定性、情性、意欲性、知性、客観性、耐性、情愛性、好感性）を掲げ、

前出の施設入所時の調査結果を得ている。その結果から発達の基本と考えられる親子関係を軸とした人間関係の持ち方、環境への適応の状態をまず初期の段階で捉えてみるべく、今年度は幼稚園児を対象に調査を行った。

幼児が自己実現に向けて向上を目指す過程では、他者に共感し、受容することにより、他者との相互作用を経験する。それによって幼児は充足感や効力感を持つことができ、幼児の自我は発達する。当然、親及び保育者は幼児の自己向上を期待し、支持することになる。今回の調査は、上記の８領域に当てはまる幼児の日常に見られる具体的な行動から設問を作って、親と幼稚園の担任に評価を依頼した。それにより、親の感じ方と担任の感じ方の共通点、相違点及び、家庭環境における幼児の行動と保育環境における幼児の行動について、評価の共通点相違点を分析検討する。

II. 調 査 対 象 及 び 方 法

1．調査の名称

「幼児期におけるパーソナリティの健康に関する調査」

2．調査対象

都心にあるA幼稚園児（4～6歳児１５１名）及び、都周辺部の小規模B幼稚園児（4～6歳児１２名）を対象にして、各園児の親及び担任教諭（A幼稚園6名、B幼稚園1名）による、園児一人ひとりのパーソナリティの健康についての評価を質問紙法により得た。

3．調査項目

調査は前出の８領域、Ⅰ．安定性　Ⅱ．情性　Ⅲ．客観性　Ⅳ．意欲性　Ⅴ．知性　Ⅵ．耐性　Ⅶ．情愛性　Ⅷ．好感性　のそれぞれの概念を表す上位項目と、それに続く下位４項目からなる４０項目（５項目×８領域）である。各項目の具体的内容は表１のとおりである。調査用紙には、下位４項目中２項目は肯定的表現で、他の２項目は否定的表現で表示し、３２項目を無作為に配置し、その後に上位８項目をまとめて付け加えた。

4．評価方法と結果の整理

（1）評価は各項目につき５ポイント・スケールを用いた。結果の処理は、評価ポイントの高い程健康度が高く、それが低い程健康度が低いことを示している。したがって、否定的表現の１６設問の評価ポイントについては、回答された評価結果をすべて変換処理して表示する方法をとり、評価ポイントとしての解釈が肯定的表現の設問と同じになるようにした。

（2）一人の園児について親と担任から評価を得るわけであるが、それぞれ園児のフルネームを記名することの抵抗を考慮して、イニシャル表示で依頼した。そのため各園児について親と担任のつき合わせが十分に出来ず数的処理に当たって、表１に示すとおり、A幼稚園の在籍１５１名中確認が出来た９３名について行った。ただし図１は、A幼稚園１５１名、B幼稚園１２名についての結果を示した。

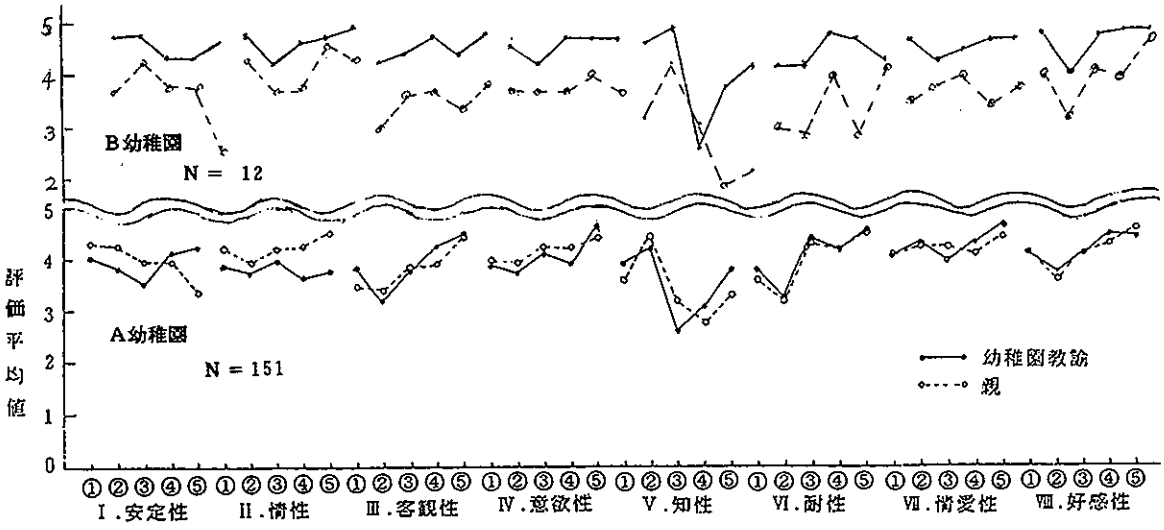

図１　担任教諭と親による幼稚園児のパーソナリティの健康に関する評価結果

表1 (1)各項目間における要因別の平均値及び分散分析の結果 (2)評価者間の相関

領域	領域別項目群	(1)要因別平均値と分散分析の結果							(2)評価者間の相関係数
		クラス			評価者			交互作用	
		年中	年長	主効果	担任	親	主効果		(担任×親)
Ⅰ安定性	気分が安定しており、機嫌がよい。	4.1	4.4	＊＊	4.2	4.3			.25
	明るくおおらかで、楽しそうにしている。	4.1	4.1		3.9	4.3	＊＊		.16
	誰に対しても、あまり好き嫌いなく、話したり遊んだりする。	3.8	4.0		3.9	4.0		＊＊	.06
	嫌なことを頼まれると、すぐ怒ったり泣いたりする。	4.0	4.2		4.2	4.0			.29
	ゲームに負けたりすると、怒ったり泣いたりする。	3.8	4.0		4.4	3.3	＊＊		.06
Ⅱ情性	快活で感情の表現が豊かである。	4.0	4.1		3.9	4.2	＊＊		.27
	この子がいると、周囲が明るくなりなごやかになる。	3.9	3.8		3.7	4.0			.20
	先生や親が本を読んであげる時など、主人公と一緒に喜んだり心配したりする。	4.2	4.0		4.1	4.2			.24
	面白いこと、また嫌なことに対して、表情に出さない。	3.8	4.1		3.7	4.2			-.08
	きれいなものを見たり、感動的なことに出会っても、それを言葉や表情に出さない。	4.3	4.5	＊	4.3	4.5	＊	＊＊	.04
Ⅲ客観性	ものごとを、柔軟に客観的にとらえることができる。	3.5	3.7		3.8	3.5	＊＊	＊＊	.07
	友達や先生の気持ちをなごませるようなユーモアを言う。	3.2	3.4		3.2	3.8			.31
	自分のしたことや考えが正しいか間違っているかを、自分で判断できる。	4.0	3.7	＊＊	3.8	3.9			.01
	自己主張が強く、友達や先生の言うことに耳を傾けようとしない。	4.1	4.0		4.3	3.9			.01
	ルールを守って遊んだり行動したりしない。	4.4	4.5		4.5	4.4			.17
Ⅳ意欲性	活発で意欲的である。	3.8	4.1	＊＊	3.9	4.0			.23
	新しい遊びや初めてのことにも好奇心を示し、積極的に取り組む。	3.7	4.0		3.7	3.9			.29
	遊び始めると、夢中になって長続きする。	4.1	4.2		4.1	4.2			.13
	自分では、やりたいことをすすんで探そうとしない。	3.9	4.1	＊	3.9	4.2	＊＊		.26
	役割を頼まれても受けるのを嫌がる。	4.6	4.5		4.7	4.4	＊＊		.05
Ⅴ知性	自分の能力がよく発揮されている。	3.5	3.9	＊＊	3.9	3.5	＊＊	＊＊	.11
	お絵かき・製作・運動などの時、誉められり励まされると、より良いものができる。	4.3	4.2		4.2	4.4			.04
	周囲の人に注目されたり感心させるようなことをする。	3.1	2.7	＊＊	2.7	3.1	＊＊	＊＊	.26
	困ったり緊張したり不愉快なことがあると、いつもならできることでもきちんとできない。	2.9	2.9		3.1	2.7	＊		.23
	できないことがあると、すぐ投げやりになってしまう。	3.6	3.4		3.8	3.3	＊＊		.04
Ⅵ耐性	困難なことにも耐えることができる。	3.7	3.7		3.8	3.6			.11
	困ったことや嫌なことがあっても、すぐには人に頼らない。	3.2	3.2		3.3	3.2			.18
	欲しいおもちゃやおやつを、次の約束の機会まで我慢して待つことができる。	4.2	4.5	＊＊	4.4	4.3			.09
	転んだり少しの怪我をしても、すぐ泣く。	3.9	4.3	＊＊	4.2	4.1			.15
	ちょっとしたことで、すぐ友達にけんかをしかける。	4.6	4.4		4.6	4.4			.18
Ⅶ情愛性	他人を思いやり、うまくつき合っていける。	4.0	4.1		4.0	4.1			.22
	小さい子や弱い子に優しく面倒をみる。	4.2	4.3		4.3	4.2			.26
	友達と互いに主張したり妥協したりしながら遊ぶ。	4.0	4.1		3.9	4.2			.16
	他の子が困っていても、すすんで手助けしようとしない。	4.1	4.2		4.3	4.0	＊＊	＊	.21
	人に迷惑をかけてもあやまらない。	4.5	4.5		4.7	4.4	＊＊		.00
Ⅷ好感性	人に好かれる。	4.0	4.1		4.1	4.0			.25
	他の子から遊びによく誘われるなど、人気者である。	3.6	3.8		3.8	3.5	＊	＊＊	.32
	子どもだけでなく大人からも好かれる。	4.0	4.2		4.1	4.1			-.17
	他の子に話しかけても、相手にされなかったり仲間はずれにされる。	4.3	4.5	＊	4.5	4.3			.17
	何となくかわいげがない。	4.4	4.6		4.4	4.5		＊＊	.18

(注) ＊印は$p<.05$、＊＊印は$p<.01$であることを示す。

A幼稚園 N=93

Ⅲ. 結　果

（1）　評価平均の比較

園児の行動についての親の評価と担任のそれを比べるのに、それぞれの評価ポイントを集計し、その平均を算出した。表1の評価者の要因欄及び、図1のグラフがそれである。表1についていうと、各領域の1行目がその概念を表す上位項目であるが、親、担任とも高いポイントを示し、とくに担任では3.8 ～4.2 であり、どの領域についても子どもを精神的に健康であると認めている。客観性、知性、耐性については親 3.5～3.6 、担任 3.8 ～3.9 であり、比較的ポイントが低い。また耐性については、領域の各項目とも評価者間の一致度が高い。

両者とも前提として子どもを肯定的に捉えているのだが、どちらかというと、現象的な項目はポイントが高いのに比べ、安定性、情性領域のような子どもの内面的な行動観察になると親と担任に差が見られ、また両者とも項目によるばらつきが目立つ。知性領域についてはポイントが 3前後と低く、評価者間の主効果も高い。

表1のクラス要因別は、年長児44名、年中児49名について、親と担任のポイントを合わせた平均値を示しているのだが、主効果のある項目をみると、発達段階を考慮しての評価が伺われる。

図1に示しているA幼稚園とB幼稚園では、担任の評価を見ると、どちらも極めて高いが、各項目においては両園で違いがみられ、それぞれ保育方針に特徴が伺われる。しかし親の評価ポイントでは、高低が見られるものの、両幼稚園とも項目間の傾向が非常に似たパターンを示している。

（2）評価者間の相関関係

全体的に低い相関関係を示し、「遊びに誘われる人気者」が0.32と最も高い。しいて言えば、子どもの行動が現象的で捉えやすい項目、この年齢レベルの発達課題であると思われる項目が 0.3前後の係数を示し、比較的に高い。

Ⅳ. 考　察

子どもは母子分離を始めると、親以外の人間関係を持ち、やがて集団に入る。そこで集団に適応し、スムーズな人間関係が持てる子どもは、順調に発達していると言える。その意味で、本調査において4または5のポイントの評価が得られることが理想であると言えるだろう。A幼稚園の園児達については、客観性と知性と耐性を除く他の領域では殆ど4ポイントを得ているので、概ね順調に発達している子どもが多いと言えるだろう。それはまた、親と担任から好感を持って扱われているということであり、養育環境、保育環境共に恵まれているということができる。客観性、知性、耐性領域でポイントがやや低いのは、「ユーモアを言う」「人を感心させる」等のパフォーマンスや、困難な場面の対処について評価が得られていないからで、対象児達の多くは自己表現や自己満足が未だ十分に行えない段階であるとみなされる。

評価者間の相違では、親は安定性、情性の評価が高いことから、子どもの情緒面に留意して育てていることが分る。同じ領域で担任の評価は低く、その点保育環境では情緒的活動がやや抑えられている傾向が見られるが、集団生活ではやむを得えないことであろう。ただし「ゲームで～怒ったり、泣いたりする」では、反対に担任の評価の方が高いが、これも園では家にいる時のように自由に感情表出ができないからではないだろうか。一方、担任は「褒めたり、励ましたり」によって、製作活動や意欲を育てる保育をしており、それは子どもを肯定的に捉えているからであり、したがって、評価ポイントが総じて高くなったと推察される。

また、同時に本調査をB幼稚園で行ったのは、地域差や規模による指導方針の違いをうかがい知ろうとしたためである。その結果によれば、担任はA幼稚園同様、子どもを好意的に受けとめているが、親はA幼稚園の親に比べ厳しい評価をしており、これは養育観の違いによるものと思われる。ただし前述したように項目による傾向は非常に似ていることから、子どもに対する親の期待はほぼ同じであるとみなすことができるのではないだろうか。反対に担任の指導方針では両園に違いが認められ、担任の児童観や地域的な環境の影響等が考えられる。

人間関係は相互作用であるから、親や保育者の対応に応えて子どもは行動し、その行動を親や保育者がどう感じて支えていくかによって、子どもはまた行動をする。そうして子どもの自我は発達していくのであるから、健康的な保育・養育環境は子どものパーソナリティの健康を考えるうえに欠かせないものであろう。

今後は本調査の結果から、子どもの内面に触れる項目を吟味改案し、子どもの自我の発達を重点的に調べていきたいと思う。

参考文献

1）吉川政夫他　「施設入所児童のパーソナリティの健康度の評価」日本総合愛育研究所紀要第25集（1989）
2）石井哲夫他　「子どものパーソナリティの健康に関する心理学的検討」日本総合愛育研究所紀要第26集（1990）